

癒しの文学としての魯迅

(東京大学) 代田 智明

最初に拙稿の由縁を紹介しておきたい。昨年(2011年)は、魯迅が生まれて130周年であり、いくつか記念の集まりが行われた。昨年3月に北京を訪れた時、中国の研究者からお誘いがあったので、こういう言祝ぎの企画はあまり気の乗らない方だが、友情を口実に出かけることとした。企画のタイトルは、「紀念魯迅誕辰130周年 暨“魯迅：經典与現實”國際學術研討会」である。場所は魯迅生誕の地、紹興の「咸亨飯店」という、ポストモダン風で豪勢な高層ホテルの大ホールで、宿もそのホテルであった。この出来たてのホテルは、短編小説『孔乙己』に登場する咸亨酒店の名をとった酒場のすぐ脇にそそり立っていたのだ。時間は9月25日26日のふつか間である。

もっとも私の報告原稿は、節電を心掛けて冷房をほとんど使わぬ夏の暑さにこと寄せて遅れに遅れ、締め切りをとくに過ぎて、主催者側をやきもきさせたいらしい。そのあげく、配布された「論文集」にはシミのような「暫飲」の文字だけが晒されることとなり、当日別刷りになって、参加者に配られるはめになった。

企画側の友人によると、当初70名から80名くらいの参加者規模を想定していたらしいが、実際に報告を募ってみると、120名あまりにふくれあがって、通常の報告時間はひとり当たり8分に切り詰められた。それでも友人のお情けで、「主題研討」に回された拙稿には、12分を頂戴したが、以下の原稿を三分の二ほどに削ることで、時間厳守を全うすることとなった。

25日午前に「開幕式」「主題研討」ののち、午後は分科会で、第一部門「魯迅經典テキスト読解」、第二部門「魯迅と現代中国」、第三部門「魯

迅の世界的影響およびその他」の三つの会議室に分かれる。翌26日の午前は「大会交流」で報告とコメントがなされたのち、総括報告があつて閉幕式となった。

中国国内のほか、台湾、香港、韓国、オーストラリア、シンガポール、ロシアなどから研究者が集まり、ホテルのバイキングはきわめて賑やかであった。日本からは、葛谷登、李冬木、工藤貴正、長堀祐造、小川利康、楊曉文、山田敬三、藤井省三(大会パンフ掲載順)の各氏が報告している。中国側の報告で気になったのは、竹内好を初めとする日本の魯迅研究を検討したり言及したものが、目に着いたことであろう。日本留学経験者の増加や中国語訳が盛んになされたことが大きな原因かも知れない。

報告が終わって席に戻った直後、出版関係者と名乗る方が、近づいて来て、今の中国ではこういう魯迅の読まれ方が必要なんだ、と声をかけてきた。「日本でもそうさ」と応じると、「原稿はいつできるのか」と聞くので、「数年後ならね」と答えると「数年後!？」と呆れたようにおうむ返しをして、立ち去っていった。したがって、以下はほんの「端緒」にすぎない。

I. 文学者魯迅

従来から中国では、魯迅について、かつて毛沢東が『新民主主義論』で規定した「三家」の問題をひとつの話題としてさまざまな紛議が起こった。「三家」とは言うまでもなく、革命家、思想家、文学者[文学家]の三者である。私は、革命家にはあまり賛成ではないが、思想家については、思想的大家がないからと言って、近代中国が

生み出したユニークな思想を紡ぎだした功績は、初期や五四時期から晩年に至るエッセイ・雑文を見れば否定すべくもないだろう。さて文学者であるが、これは争う余地がないと思うが、さてどんな文学者なのか、という点になると、おそらく議論が分かれるに違いない。

確かに、近代ヨーロッパの大家に比べると、魯迅の創作の量は多くないが、作品の長さや数が、文学者の力量を決めるものでもないだろう。もっとも数少ない短編小説にしても、評価の仕方によって、魯迅がどんな文学者なのか、意見が異なるところである。異なる解釈があることは、魯迅文学にとってよいことだろうから、私は他人の評価を否定したくない。むしろ対話によって、相互に新しい刺激を与えあうことが大切なのだ。

そこで私の評価であるが、戦闘的文学者でも、苦悩と葛藤の文学者でもない。私が主張するのは、癒しの文学者である。なぜ癒しの文学というのかについては、すぐに拙い説明をするが、読者の側から考えても、実は魯迅文学（必ずしも小説とは限らない）は、失意のなかにある人びとに「癒し」を与え続けてきたからである。

第二次世界大戦前、ゾルゲ事件にかかわったコミニスト尾崎秀実が、日本の警察によって逮捕、処刑された。その異腹の弟であった尾崎秀樹は、当時「裏切り者」の一族として、世間から白い目で見られていた。そのとき彼は魯迅を愛読し、そこから自分を支えるものを得ていったと、当時を回想して述べている。また文化大革命当時に「反革命分子」とされて、労働改造や上山下郷運動で農村に追放された青年たちも、魯迅全集はバイブルのような役割を果たしたようだ。それは、紅衛兵運動のときのような、戦闘的の字句ではなく、模索と葛藤のことばであった。そのひとりが、私の敬愛する中国の魯迅研究者・銭理群先生である。彼はつぎのように述べている。「私たちはちょうど当時の魯迅と似たような精神的探索の過程を経

たのである」。「魯迅は[……]六、七〇年代に成長した若者の世代と魂の共振を起こした」。それが80年代、ポスト文革におけるさまざまな新しい試みにつながっていったことは言うまでもない。ただそれよりも、以上の簡単な例から分かるのは、読者を癒し励ます文学、というのも魯迅文学の本質ではないか、ということである。だとすれば、魯迅の小説のなかにも、その「癒し」の構造があることになるだろう。

Ⅱ. 「癒し」と「主体」

一般的に言って、癒し＝精神的な治癒というのを定義すると、つぎのようになる。当人の精神思想にとって、受け入れがたい現実が存在する。現実とは、被害者の場合もあるが、加害者の場合もある。被害的な場合は、周囲から疎外されたり糾弾されたり、いわれのない誹りを受けるようなケースである。また加害的な場合とは、ある事件の出来に対して責任を感じ、恥辱や罪悪感を抱くこと、強い後ろめたさを感じて、自分を許せないような感情を抱くことである。なお被害者的と加害者的とは、厳密に区分されることなく、相互に融合し複雑な様相を呈することもあるだろう。

これらの現実を受け入れがたいがために、その人の内部で、葛藤や苦悩（強いストレス）が生じる。精神医学的には、強いストレスが解決されなのまま、精神の深層に宿ると、病的な状態に到ることもあるという。葛藤や苦悩は、病的状態の萌芽であり、そこからの治癒とは、まず受け入れがたい現実を受け入れることから始まるのだ。

さらに、こう言ってもいいかもしれない。社会的現実とは、各人を関係性の内部に含んでいるために、一人ひとりを第三者的な傍観者ではなく、往往にして、事態の被害者や加害者にする。むしろ傍観者の立場から現実を見るとき、社会的現実の重大な側面を見失わせることになりかねないので

ある。現実に関わりかけ、変革するには、まず受け入れがたい現実と向き合うことが必要であり、すると現実を「受け入れられない」ために葛藤と苦悩が生じる。その初歩的な病的状態を抜け出すために、受け入れられない現実を受け入れるプロセスが生じる。このプロセスが癒しの一歩と言えるが、現実への関わりかけが可能になるのも、つまりは受け入れがたい現実の承認から始まるのである。そして、結論を先取りして言えば、当人の内部において、ある現実を受け入れがたいとする眼差しと、にもかかわらず受け入れることを許容する眼差しが、矛盾しながら同一の地平で共存することが癒しにつながり、この場合、癒し＝治療のプロセスは、現実に対して関わりかける主体を構成する重要な要素となるはずなのである。

私から見ると、魯迅の文学とりわけ小説には、治療のプロセスの一部またはすべてが、ある種のパターン、「型」として取り込まれているように思われるのだ。魯迅の文学が、ここで言う「癒し」のプロセスを構造化して見えるのは、もとより魯迅の思考の型にかかわっているだろうが、おそらくは、魯迅の少年時代の実体験が影響しているものと思われる。

魯迅が少年の頃、祖父が贈賄事件により下獄して、彼の一族は没落し、周囲から手のひらを返したように白眼視されたことはよく知られたことだ。この伝記的事実が、魯迅にどんな大きな衝撃を与えたかは、『呐喊』『自序』を初めとして、多くの証拠が挙げられるだろう。それは故郷・紹興に対するアンビヴァレントな感情を魯迅に抱かせたし、人びとの非人情に対する復讐の念をも抱かせた。慈愛と復讐、人道主義とアナーキーな個人主義、魯迅が終生、彼の内部に矛盾と葛藤を抱えたこの両極の感情的立ち位置の構図の原型は、すでに若き周樹人の時代にでき上がっていたとも言えよう。ただ先の区分にしたがえば、このストレスは被害者的であった。被害的位置は、『狂人日

記』の主人公に描かれたように、自己もまた社会的現実を構成する一員であることを自覚することによって、加害的位置でもあることの自覚に到る（『四千年の人を食う経歴をもった私、初めは分らなかったが、いまははっきりして……』）のだが、もともとの経験的事態それ自身が、彼の被害的事実に起因していたということは重要である。魯迅が、このストレスを克服して、いかに個人的怨恨ではなく、中国社会全体を見通す視点に立ち得たのかは、いまだ謎の部分が多いが、ここではこの問題には触れない。

ところで魯迅が、加害者のストレスに苛まれた時期は、あるいはかなり早いかも知れない。文壇論壇に登場するまでに、民国政府の官僚として、さまざまな出来事に出会ってきたからであるし、母親に従った不本意な結婚もしていたからである。これらは、社会的環境の問題でもあったが、自意識からすれば、彼は加害者的位置にいたと言えるのであった。しかし、そのストレスは五四新文化運動の昂揚のなかで、抑制されていた。魯迅の伝記から見てみると、加害的位置のストレスが顕在化するのには、1923年から1927年に到る時期、小説集にすると『彷徨』の時期に当たる。そこでここでは、加害的ストレスの癒しの過程を『彷徨』のいくつかの作品のなかから考察してみたい。

Ⅲ. のびやかな心地よさ

従来から『彷徨』のテキストの解釈として、話題になっていることがある。それは、語り手である登場人物が作品の結末部で、同様な、または類似した感情表現を示すことだが、そのことばの解釈がやや分かりにくいことであった。そのため、小説作品の解釈についても、かなり異なった、極端に言えば、相反する記述が見られるのである。いまここで扱うテキストは『祝福』『孤独者』（この系列の作品として『在酒楼上』も含めることができる）『傷逝』の3篇である。類似した感情表

現というのは、以下のような部分だ。

『祝福』において、語り手「私」が祥林嫂の死を知って、彼女の生涯を語り出す直前のことば。「私は、窓の外で降る雪のかけらのまるでかほそい琴のような音に耳を傾けながら、一方で考えたが、かえって段段と気持ちが伸びやかになってきた[舒暢]」。同じく、「私」が祥林嫂の物語を語り終わったのち、魯鎮の年越しを祝う爆竹の音が鳴るなかで、「私」の心情である。「私は騒々しい抱擁のなかで、けだるいが心地良くなり[舒服]、昼間から夕時の疑念は、すっかり祝福の空気によって振り払われてなくなってしまった」。

続いて『孤独者』の末尾で、魏連受の葬儀に参列した語り手「私」の耳から、狼の遠吠えのようなあらがう声が絞り出されたのち、「私」が語ることばである。「私の気持ちはほっとして[轻松]、ゆったりと湿った、石畳の上を歩いていった、月の光のもとで」。同様に『在酒楼上』にも、かつての友人呂緯甫と別れたのち、「私」がつぎのように語っている。「私はひとり自分の宿に向かって歩くと、寒風と雪の破片が顔にぶつかってきた。私はかえってすっきりとした気分[爽快]になった」。

最後に『傷逝』のラスト、主人公涓生の独白であるが、以上のことばと同様の課題が含まれているものの、やや異質なので、のちの分析のなかで取りあげることとしよう。

以上ここで引用したことばにおいて、語句に類似したものが見られることに気付くだろう。「舒暢」、「舒服」、「轻松」、「爽快」という形容詞群である。これらの語彙は、ある捕らわれた桎梏から解放され、開放された気分を表現するとも言えよう。この気分の解釈には、前に述べたように大きな差異がある。解放や開放ではなく、語り手「私」の逃避、墮落と考える解釈であり、もしかすると現在でもこの解釈の方が多数かもしれない。要するにこれらの語彙は、かつて古い封建的なものと闘った戦闘者が、挫折と敗北に遭い、現実から逃

避しようとしている表現であって、魯迅はそうしたかつての戦闘者の「転向」を批判している、という作品解釈である。この解釈を全面的に退ける根拠は、私にはいまないが、ここでは私の関心にしたがって、これらを挫折と敗北に対する癒しのテキストとして読んでみたいのである。魯迅自身が、五四退潮期に同志的友人と疎遠になり、とくに弟周作人との不和という衝撃的伝記事実があるからでもある。

まず『祝福』が典型的であるが、語り手「私」は、別の重要な登場人物、祥林嫂に対して、ある種の「後ろめたさ」を抱かざるをえない位置にいる。つまり加害的意識があるのだ。ただし祥林嫂もまた、愛する息子を死なせてしまったという意味で、自らを責めており、ある意味で同じように加害的な位置にいる。祥林嫂の死は、一般的には悲劇であるし、魯鎮の人びとの彼女に対する非情な仕打ちを浮きだたせるが、物語はそれを語っているだけであろうか。祥林嫂の死が、彼女を加害的位置から解き放ち、彼女が息子を「抱擁」しようとする願いは、語り手「私」の加害的位置をも解除するのではないだろうか。

『祝福』を語り手「私」を救済する物語として読んだ例として、中国哲学の研究者である日本の中島隆博の議論がある。「不安と不眠とに苛まれながらも、「わたし」は犠牲になった母性に対する絶対的な忘恩のなかにいる。その絶対的な忘恩によって「わたし」は「安らいだ気持ち」になるのだ。しかし、その幸福を根底で支えているのは、見捨てられた、忘れ去られた、祥林嫂の「擁抱」(抱擁)ではないのだろうか。それは彼女にとっては、自分の子どもを抱き取る抱擁であったが、その抱擁が抱き取ったのは、自分の子どもだけではなかったのである」(『残響の中国哲学』東京大学出版会、2007年)。ここには母性的な、許しの眼差しも組み込まれている、という解釈が成り立つのである。

語り手「私」が加害的位置とは言えないが、語り手と同類である、別の登場人物の生涯を見つめる物語がある。『在酒楼上』であり、より物語的な濃密さをもっているのが『孤独者』であった。『在酒楼上』の呂緯甫も、祥林嫂のようにはっきりはしていないが、ある種の加害的意識のなかにいる。それはかつての「改革」の志を放棄したことでもあるが、弟の遺骸を見失ったことでもある。『孤独者』の魏連受もまた、彼に生きのびてほしいと願う（おそらくは）恋人を救えなかったことについて、ある意味で「後ろめたさ」を感じており、彼女を失ったことによって自暴自棄的な選択を行い、自らの願いとは相反する生き方をする。

そして『在酒楼上』では、語り手の登場人物呂緯甫に対する態度は、小説の末尾で、語り手「私」が呂緯甫と反対の道を歩くことによって、曖昧ながら表現されていると言えるけれども、決定的な結論はまだ留保され、宙づりにされた印象が強い。これに対して『孤独者』においては、魏連受が自らの生命を縮めるような生き方をしたのち、自殺するように病死したことが描かれる。従来から指摘されていることだが、『在酒楼上』の語り手「私」と呂緯甫、『孤独者』の語り手「私」と魏連受とは、ともにテキストを創作する魯迅の分身であろう、という考え方があるが、筆者もこれに同意したい。ただここで注目したいのは、語り手「私」は、必ずしも呂緯甫を容認したとは言えないし、ましてや魏連受の、重たいが行く手のない生き方を肯定してはいないことである。

ふたりが語り手「私」と同類であることによって、語り手「私」の思想的困窮も明らかになるとともに、彼らの実存的現実性が明らかになる。ここでは、語り手「私」は、呂緯甫や魏連受と同じく、作者の分身であるが、語り手の役割は自らの存在様式を積極的に提示することではなく、ふたりの登場人物に自らの分身としての側面を託し、それを消極的に、または否定的に見守ることであ

った。これは、癒しという角度からすれば、自己を対象化して見据える眼差しを獲得したということでもある。『祝福』のような抱擁と許容については、これをあくまでも母性的眼差しと述べてきた。それがあって、内省的な自己対象化の視線が生まれるのである。この抱擁と許容によって対象化することができた自己の暗闇をえぐり出し、解剖して、そこから抜け出す方途を探す一步を歩むこと。それがやや茫漠としているが、緩やかな心地よさとなって、これらのテキストの語り手「私」の心情を描き出していると解釈してもいいのではないだろうか。

VI. 『傷逝』の末尾

さて『傷逝』末尾における、涓生の後悔と悲しみのことばを、癒しのプロセスとしてどう扱うか、取りあげてみよう。「私は生きて、新しい生の道に向かってどうしても歩み出さねばならない。その第一歩は——だが私の悔恨と悲しみを書き残すことにすぎないのだ。子君のため、私自身のために。」

私にはやはり子君を埋葬し、忘却のなかに葬る、歌のような泣き声しかない。

私は忘却しよう。自分のために、なおかつ、この子君を忘却によって埋葬しようとすることは二度と思いつくことはすまい。

私は新しい生の道に向かって歩み出そう。真実を心の奥深い傷のなかにうずめ、黙ったまま前に進もう。忘却と虚偽を導き手として……」。

前で紹介した3篇と、大きく異なるのは、ここには伸びやかな、心休まる形容詞は見あたらないということである。あるのは、厳しく自己責任を問うことばとそれを忘却することによって、虚偽に頼っても生きようとする激しい生命力の表現と言ってもよい。

物語そのものは、涓生と子君は自由恋愛によって結ばれたはずだったが、経済生活の破綻がふた

りの信頼を動揺させ、涓生の方が子君に対し別れを告げる形で、関係は破綻する。そののち子君は、生きる方途も希望も失って、自殺するように死んでしまう。涓生の加害的位置の告白が、物語の結末であった。この結末の独白は、暗く絶望的ではないのか。

しかしまず指摘しておきたいのは、前3篇同様に、ここでは『傷逝』の物語における「悔恨」「悲哀」を書きとめることが、語り手涓生を救っていることである。ある心理学者が述べるように、「語るという地平が与えられなかったら、疎外的現実の克服は具体的に構想しえなかったであろう」(村上靖彦『治癒の現象学』講談社、2011年)。被害的であれ、加害的であれ、疎外的現実を克服するには、口頭の語りまたは文字の記述を必要とすると思われる。

さらにここでは、強い悔恨の意識を抱えつつ、なお「新しい命」に向かって第一歩を踏み出そうとする、涓生の意志に注意したい。前3篇と異なるのは、悔恨の意識は、もはや弁解や感傷や何かの支えによっては、溶解しないことである。だからこそ、伸びやかさは姿を消す。だが社会的現実に関わりかけようとする主体の形成には、既述のような自己を許容する母性的眼差しだけでは、不十分であった。忘却とともに、生きることの責任を生み出すものとして、自己を監視し、新たなモラルに従属する眼差しが、そう言うてかまわないのであれば、父性的視線が必要なのであった。

『傷逝』には、興味深い逆説がある。子君の死は、当時としてきわめて女性的な動機によるものであった。涓生が非難されるとすれば、フェミニズム的立ち位置からであるとも言える。だが、非難や批判を受け止める涓生の自己のなかに形成されるのは、父性的なものと言ってよい。極端に言えば、子君の幽魂は、母性的位置から、とっくに涓生を抱きすくめ、救済しているという読みも成立するのではないだろうか。3篇を読んだ上で考

察すれば、涓生の生は子君を含めた母性によって承認されているのだが、そのまま生きることが、墮落に陥ることを意識は知っている、この「女性的」立ち位置は、涓生の墮落を回避するためにも、父性的な視線を招き入れる。こうして、偽りの「忘却」によって許容されつつ、許容されたことの責任として、現実への働きかけを義務付けられる「主体」が成立したということではなかろうか。魯迅的な主体の型が、こうした女性性の眼差しと父性的な監視役によって、成立しつづけていたと私は解釈したい。

おそらく、魯迅の生涯では、こうした主体形成が、大きな形でも、ささやかな波としても、起こり続けたのかもしれない。ただ彼の生涯を見通せば、それは青年時代にはじまり、1927年くらいに、完成したとも言えよう。むろん、こうした小説創作の様相が、人びとに癒しを与えうるかどうかは、また別の問題であろう。しかし、彼の伝記的事実と創作の構成を読み解いていくと、魯迅の文学は、確かに偉大ではあるけれども、そのなかに「治癒」の要素が潜んでいることだとも言えるのである。そして魯迅自身は「速朽」を望んだけれども、この社会に疎外的現実があり続ける限り、そしてそれに対する克服が求められる限り、魯迅文学は、魯迅の意図に反して生き残るはずなのである。